風来坊の歩く道

ganma

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
風来坊の歩く道

【Ｎコード】
Ｎ７３１０Ｑ

【作者名】
ｇａｎｍａ

【あらすじ】
男は『鉄刀・神楽』を引っさげて、今日もふらふら狩りをする。
生きるために、食すために。
自然相手の彼の生活に、終わりの時はまだ来ない。

（前書き）

この小説はＭＨＰ３を原作に書いております。
また主人公が特殊な（ゲーム上あり得ない）能力を使いますが、
仕様ですのでよろしくお願いします。

「まいったなぁ。」
男はあくびをしながら、ゆっくりと体を起き上がらせる。枕元には自分のポーチと、鉄刀『神楽』が置いてあり、それを彼は手に持って、もう一度大きなあくびをした。
ちかくには水が流れ、小さな川のようなものや、倒木からキノコが生えている。そしてあたり一面を緑のコケがびっしりと覆っていた。小さな甲虫『オルタロス』はせっせと餌を巣に運んで行き、男の前を横切る。男は頭をぽりぽりと掻きながら、ポーチの中身をがさごそとあさる。
「まったく、まいったもんだなぁ。」
いつも男が使っている道具が、3日前からなくなっているのだ。昨日の時点で、犯人が誰かというのは突き止めることができたのだが、どうも自分のさぼりぐせで「まぁいいか」と寝てしまった。それが間違いだったと気付いたのは、2日後の事だった。
急に男の腹が鳴る。そう、盗まれたアイテムは『肉焼き機』。生肉を焼いて食用にする道具だ。男はポーチに入っている薬草を口にほおり込んだ。これのおかげで栄養失調で倒れることは無いが、腹は全く膨れない。
男がふと横を見ると、紫と赤色をした服を身にまとう、背中に大きな銃槍を背負った少年が近づいてくる。少年は座って木にもたれかかっている男に気付くと、驚いたのだろうか、ビクリと体を震わせ、そしてすぐに近寄ってきた。
「大丈夫ですか？　顔色が悪いですが……。」
少年はすごく不思議に感じたのだろう。目の前にいる見知らぬ男は、髪の毛はボサボサで手入れもしてなさそうで、口ひげも伸びていて、風呂に入っているのか疑ってしまうくらい汚かったからだ。そして、着ている物は入門ハンター用の『ハンターメイル』と『ハ

ンターグリーヴ』だけの、狩場にいる人間の姿ではないと思ったのだろう。実際、そんな装備をしているのは行商人か無知なハンターくらいだ。
男は少年の気持ちを理解しながら、声をかけてくれたことにすごく感謝した。この後すごく話がしやすくなるし、何よりこんな男に話しかけれる人間は、優しい人間ばかりなのだとわかっていたからだ。
「だいじょうぶだ。心配してくれてありがとうな。」
その言葉の直後、さらに大きな腹の音がなる。少年は自分のポーチから『携帯食糧』を取り出し、一つを男に渡す。男は頭を掻きながら、「すまんな」とお礼を言った。
「少年。」
男は携帯食糧を一瞬で食べ終わると、立ち去ろうとする少年を引き止めた。鉄刀『神楽』を握り、むくっと立ち上がる。すると男と少年の身長が違いすぎるのか、少年は少し顔を上げて話をしないといけなかった。
「お礼がしたいんだが、これからどこへ向かうんだ？」
男は知っていた。こういう辺境の土地へ来るものは、自分と『ハンター』と呼ばれる戦いのプロしかいない事を。そして理解していた。この少年が、戦いのプロとしてここに来ているという事を。
だが少年の方は、男が一般人と思ったのだろうか、困った顔をした。その顔を見て男は、きっと大型モンスターの討伐なのだろう。それをハンターではない人間に手伝いなど危険すぎて頼めないのだろう、と思った。
ならば、実力を見てもらったほうが早い。そうすれば少しは手伝わせてもらえるだろう。そういう結論に至った男は、ちょうど近くにハチミツを取りに来た青熊獣『アオアシラ』がいることに気がついた。そして、右手に太刀『神楽』を握ると一目散に走り出す。その行動に少年は驚いて動けなかった。
アオアシラは食事の邪魔になる男を、すぐに敵と判断したようだ。

前足を高く上げ、威嚇の行動に出る。そして大きな前足を振り、男を追い払おうとした。だがその攻撃は空を切り、男は熊の後ろに立っていた。そして太刀が振られ、あたりに鮮血が散る。

少年はまるで夢でも見ているようだった。目の前にいる熊は男を追いかけるが、ただの一度も攻撃が当たらない。それどころか、太刀は確実に獲物を切り裂き、命を削る。顔に笑みを浮かべながら男は太刀を振りまわしていた。少年はそれを見て、自分とは比べ物にならないほどの実力者だという事を理解した。

しばらくして、男が太刀を振り回しているところに、やっと少年が走ってきた。ただ少年は武器を構えず、地面に手を置いた。男は何をやっているのか理解できなかったが、とりあえず邪魔をしないように熊の相手をしていた。少年は立ち上ると、ポーチから赤いボール『捕獲用麻酔玉』を取り出した。男はそれを見ると後ろへ飛びのき、太刀を鞘に収める。熊は息を荒立て、2人に対して突進攻撃を繰り出そうと、体をかがめた時に、熊の体がビリビリと痺れた。

足元の『シビレ罠』が発動した。そして少年の麻酔玉がぶつかると、強烈な睡魔に襲われた熊はぐったりとその場に倒れた。

「強いんですね。」

「……そうか？」

少年は男に向かっていった。男は謙遜するでなく、真面目(まじめ)に答えた。そして自慢の太刀を抜くと、拾い集めた砥石で丁寧に武器を砥ぎだした。その手つきは、さっきまで熊を斬りつけていた人物とは思えないくらい繊細だった。そして常人の数倍早く、きれいに砥ぎ終わった。

「で、お礼をしたいのだが……ターゲットがいるんだろ？」

男は太刀をしまい直すと、少年に向かって言った。だが少年は笑って首を振る。

「もう終わりましたので。」

ふと少年はアオアシラを指差す。今回のターゲットはこいつだったのだ。男はハハハと大声で笑った。少年もつられて笑う。

「かわりに……」
少年はポケットからカードを取り出した。
「ギルドカード、交換しませんか？」
だが、男はそんなもの持ってはいなかった。少年から手渡されたカードを物珍しそうに眺めた後、わけの解らぬまま返した。男は正式なギルドメンバーではない。というより、ハンターですらないのだ。
男は突然、ふっと顔を空に向ける。そしてニヤリと笑うと、空からの来訪者を迎えた。少年も空へ目を向けた時、来訪者は大きな咆哮を浴びせた。
「リオ……レイア！」
少年はその場に風圧と咆哮で倒れ、身動きができなかった。だが男はもろともせず立ち向かう。さっき砥いだ愛刀『神楽』を、渾身（こんしん）の力をこめて振る。
……ほんの数分のことだった。男と雌火竜の激闘を、少年はただただ見ているだけだった。太刀が光り、火竜が尾でなぎ払い、火を吹いた。そして、雌火竜の尻尾がぶつりと切れ、先端が宙を舞う。さすがの火竜も一度態勢を立て直すため、空へと舞い上がるその時。
「少年、それはお礼だ、もっていけ！」
なんと男は、リオレイアの足をつかみ、そのまま空へと飛んでいってしまったのだ。少年は雌火竜の尻尾と一緒に、その場に取り残されていた……。

「あ、しまったなぁ。」
満月の夜、リオレイアの屍の上に立ち、男は思った。
「肉焼き機、無いんだったな。」

腹の音がまた、大きく鳴り響く。

（後書き）

この作品は、前作のコメント欄で、太刀好きな方が
『読んだらガンスの話で残念』っぽい事言われてたので、
ならば太刀のストーリーも（見た目は好きだし）
書いてやろうじゃないか！と勝手に暴走した結果です。
あと今回は『名前を出さない』と『地書きを長く』事を
頭に入れて書きました。でも全然できてないっぽいw

実は、前回作品『銃槍ファイト！』と世界がつながってます。
前作読んでた方はわかったと思いますが……。
また、男がリオレイアの咆哮と風圧を無視して戦ってますが、
チート仕様です、はい！

最後に皆さん、読んでくださってありがとうございましたm（
＿）m

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7310q/

風来坊の歩く道

2011年3月31日10時55分発行